光の歪幕 - hikari no himaku -

日本建築に柔らかな光の空間をもたらし、現在では欠かすことの出来ない存在、それは和紙であると言ってよいだろう。

だが、近代以降ガラスが安価に手に入るようになると、その強固な遮蔽性能、新たな透過性から和紙はガラスにその地位をとって変わられることになり、同時に日本建築は多くの部分であの柔らかな光を失うことになった。

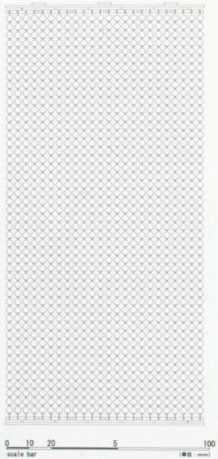
その後、ガラスの技術の発展と共に、和紙に似た光を得ようと擦りガラスやプラスチックで代用が試みられてはいるが、明らかに光の質が異なることは皆が感じていることだろう。その原因は、光の透過性だけではなく、紙に対する脆く儚いという心象も関係していると思われる。

だが、イメージとしてガラスには「割れる」ということがあるため、その点ではガラスも近い心象の光を生み出す別の形となる可能性は十分にもつのではないか。

そこで、ここでは「ガラス玉」を用いた境界線を提案する。

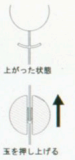
これにより表現される境界は、和紙にように「覆める」のではなく、光を「歪める」。近年、平らなガラスではなく、技術が未熟であった頃のような歪んだガラスを意図的に用いた建築が見られる。そしてそれに抱かれるのは、ただ懐かしい、といった印象ではなく、人間味があるなどということも含まれ、ガラスの歪みが人を引き付ける力を持っている可能性を感じる。

誰もが皆、幼いころ、その中を覗き込んだことがあるだろう。ガラス玉の中には、反転し歪められた世界が広がっている。



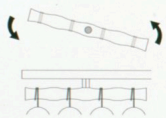
揺らぎ

細い線と四つの可動部によって、ガラス玉による幕を提案する。
この二つの特徴により、ガラス玉を透過する光は動きを与えられ、落ちる光は水面のような表情を持つことになる。また、幕であることは、ガラスの硬質な印象を柔らかなものに変質させる。



糸

ガラス玉を支えるのはガラス玉の透過性を邪魔する事のない透明なものを用いる。ガラス玉は1つずつ支えられており、破損時にはそれより上部の玉を抜き取り、挿し換えが出来る。



回転部

上下二箇所に設けられた可動部により、風を受けた際の幕に、若干の回転動を持たせた。これによって、幕はより豊かな表情をもつ。

色彩

色を持ったガラス玉を用いれば、内部に様々な色彩の光を持ち込むことが可能である。
複数の色を同時に用いれば、ガラス玉を透過した光が交じり合い、新たな色彩を生むことになる。
また、幕を構成するガラス玉の色を組み合わせることによって歪幕に模様を付けることも可能であろう。